

柴田天馬訳 蒲松齡「聊齋志異」

長清僧

「やぶちゃん注」底本は国立国会図書館デジタルコレクションの昭和八（一九三三）年第一書房刊「全譯 聊齋志異 卷一」の当該話を視認した。但し、加工データとして所持する昭和五一（一九七六）年改版八版角川文庫版「完訳 聊齋志異」第三卷（新字新仮名）のそれを用いた（但し、相当に異なる）。底本は頭注であるが、段落末にポイント落ちで【】で附した。ルビは天馬氏のまさに天馬空を翔るが如き自在見事なそれは残らずとることとし、振れないものは省略した。不審な箇所は「中國哲學書電子化計劃」の北京大學

図書館蔵の影印本画像で確認した。」

長清僧

長清縣の某といふ道行高い僧は、八十餘りになつても、猶だ健であつたが、一日、倒仆たまま起きあがらないので、寺の僧たちが救けに奔けつけたときには、已う（一）圓寂で居た。【（一）僧の死ぬのを、眞寂とも圓寂ともいふ。】

けれど、僧自身は、死んだことを知らなかつた。そしてその魂は、飄と河南に去つたのである。

河南に、古紳子があつた。馬に騎つた十人餘りのともびとを率れ、鷹を按ゑて獲兎をして居ると、馬が逸たので、墮ちたまゝ斃でしまつた。

僧の魂は、適こり相値つた。そして翕然と、合になつたかとおもふと、遂て、漸々蘇つたのであつた。

廝僕らが環て、問之ると、いきかへつたひとは目を張り、「胡して、此な所へ來たんじや」

と曰つたが、衆は扶けてやしきに歸つてきた。門を入る則、粉白黛綠者が紛集つて、顧問ねるので、大そう駭いて曰つた、

「我は僧じや。胡うして、此んなどころへ來たんじや」

家人は、妄つたのだと以爲ひ、耳を提へて、悟之すのであつた。僧は、亦う不自申解つた。但だ目を閉ぢてゐるだけで不復有言のであつた。（三）脱粟を餉以せれ則食ふけれど、酒や肉は拒んでくはず、夜は獨りで宿て、妻や妾の奉を受けないのであつた。

【（二）前漢公孫宏傳に位宰相封侯而爲布被脱粟之飯とある。】
數日かすぎた後、忽と、少歩きをしたいきがするといひだしたので、衆皆は喜んだ。既てそとに出て、小定をして居る即、諸僕が、粉ばらやつて來て、錢の簿や穀の籍をもちだし、雜ごた會計を請ふのであつたが、公子は托以病倦け、悉り之を謝絶つて、ただ、

「山東長清縣を知つてるか否か」

と聞いた。共は、

「知之をります」

と答へた。公子は日つた、

「我は、鬱無聊頼いから、遊囑に往かうと欲ふんだ。宜即支度をしてもらはう」

衆は、

「新瘳なんですから、遠渉をなさつてはいけません」

と謂つたが、聴かないので、翌日、遂う發つことになつた。

長清につくと、風物が、昨の如だつたから、途を問く煩しさも無く竟て蘭若に至た。お

弟子の僧たちは、貴な客人が至たのを見て、伏謁甚恭つた。すると公子は問いた、

「老僧は、焉に往れたかね」

僧たちは答へた、

「吾師さまは、曩に已う(三)物化られました」(三)死をいふに忍びないので、物に随つて化した

といふのである。】

「お墓所はどこかね」

で、群で導して往つてみると、三尺孤墳があつて、草も、荒草猶未合なかつた。

僧は、何の意だか、不知いであると、既而馬の戒をさせて歸らうとしながら、囑

けて日つた、

「汝たちのお師さまは、(四)戒行之僧だつたのであるから、(五)所遺手澤は宜格守て

いためてはならぬ。勿俾損壞んよ」(四)戒行とは、殺生、偷盜、邪淫、妄語、酒肉の五戒を保つてゐるといふこと。(五)禮に

父没而不能讀父之書手澤存焉爾とあつて注に手所持猶存潤澤迹也とある。手でもつた所が、あぶらじみになつてゐる

といふ意である。「やぶちやん注」最初の傍点は頭の「父」に振られていないが、「礼記」に当たつて確認したところ、

傍点は打ち忘れと断じ、添えた。】

衆は唯唯といつた。乃で公子はたつて行つたのであるが、既歸てからは灰心木坐にな

つて家務など不可句當つた。居數月ると、出門自遁て、直ぐに舊の寺に抵つた。そして弟

子たちに、さう謂つた、

「我は、汝たちの師なんじや」しかし、衆は疑其謬とおもつて、相視而笑つてゐ

た。で、僧は魂の返つた由を述し、又て平生の所爲を言つてきかせた。それが、悉り符

つ居たので、衆はやつとそれを信じ、故の榻に居かして、平日の如に事へたのであつた。

その後、公子の家から、たびたび興や馬をよこして、かへつてくれと哀請^{たの}みだけれど、略^{とん}と不顧^{みむきもしな}諱^{いな}かつた。すると又一年餘りして、夫人が(六)紀綱^{けいこう}を遣^{よこ}して、多^たな餽^{おくりもの}遣^ししたのであるが、金や帛^{きぬ}などは、皆^{みんな}な、卻^{かへ}之^しして、惟^{ただ}だ一襲^{ひとかさね}の布袍^{ぬのこ}を受けとつた而已^{ばかり}あつた。

【(六)左傳僖二十四年に秦伯衛送晋三千人實紀綱之僕とある。】

友人^{ともだち}が長清^{ちやうせい}に至^ゆくこと或^{など}あつたをりに、敬造^{たづねてい}之^しつて見^{やうすをみ}其人^{ひと}と、默^{だま}然^たりこんだ、誠^{まじめ}篤^{あつ}な僧^{ぼうさん}になつてゐた。年^{とし}は僅^{わずか}かに(七)而^{さんじふ}立^たくらみだつた而^{けれ}ど、八十年餘^{はちじゅうねん}りの事^{こと}を道^{みち}すのであつた。【(七)論語爲政篇に三十而立とある。】